

あれから310年

# (財) 中央義士会 会報

創立明治41年

平成24年12月発行 No 64

## 目次

- ・中山安兵衛・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一
- ・堀部安兵衛の刎頸の友・佐藤條右衛門 富澤信明・・・・・・二
- ・近年忠臣蔵事情 中島康夫・・・・・・十
- ・第十回忠臣蔵博士試験問題・・・・・・・・・・・・・・・・十一
- ・業務報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・十四
- ・自由広告 今期新入会員紹介・・・・・・・・・・・・・・・・十五
- ・毎日新聞記事「堀部安兵衛との縁、墓標に」編集後記・・・・十六

所方み誠公自ら知付者中一  
 方とて毎事として  
 彩々たる日々  
 右に任んぬれ  
 夫れ兄弟同業  
 言はれりて  
 彼を新事としかり候也

以上

六月



中岡武外  
 生國劫後  
 中山安兵衛  
 清光

## 堀部安兵衛の刎頸の友・佐藤條右衛門の出自について

新潟大学名誉教授 富澤 信明

はじめに

佐藤條右衛門著『浅野内匠頭殿御家士敵一件

佐藤條右衛門一敵覚書』(以下『佐藤條右衛門覚書』と記す)の写本が、赤穂義士討入りから丁度、三百年後の平成十四(二〇〇二)年一月に、財団法人中央義士会の中島康夫理事長によって発見され、七月にはその解説書が出版された。

この写本は新発田の三扶誠五郎によって、昭和十七(一九四二)年六月十九日に原本から写されたものであるが、残念ながらその原本は現在行方不明である。

『佐藤條右衛門覚書』には、従来全く知られていなかった新事実が数多く記されており、特に堀部安兵衛が討入りに遅刻して来たことは、新事実として、平成二十三(二〇一一)年十二月のNHKテレビ番組でも報道され、大きな反響を呼んだ。

しかるに筆者は平成二十四(二〇一二)年十一月、本稿の執筆後に、吉良邸討入り当時の本所砂村名主渋井一睡が著したと考えられている『秋乃田面』の中に、堀部安兵衛が二人の甥に助けられて吉良邸の表門に着いた時、既に邸内では切り結びが始まっており、表門も裏門も閉ざされていたが、甥の佐藤城右衛門に助けられて、傍らに指し掛けてあった梯子を用いて、無事邸内に入ることが出来た旨が書いてあることを見いだした。この佐藤城右衛門が佐藤條右衛門その人であることは疑う余地がない。

さらに、その時、大石内蔵助は安兵衛の延引を心に懸けて、今や今やと待っていたところであり、

いまだ吉良上野介と覚ゆる敵に逢っていないので、安兵衛に若い者共に下知するようにと申渡した等とも書いてある。

この安兵衛の遅参の一件だけを見ても、佐藤條右衛門は実在の人物であることが分かる。さらに『佐藤條右衛門覚書』が、正に吉良邸討入りの実況見聞録とも言ふべきものであり、きわめて信憑性が高い史料であることが知られる。

本稿では佐藤條右衛門の出自について、これまでに判明したことを紹介する。

## 一、佐藤條右衛門は堀部安兵衛の従弟か

赤穂四十七士による吉良邸討入りの実況見聞録である『佐藤條右衛門覚書』の著者佐藤條右衛門が如何なる人物であるかについては、従来殆ど分かってはいない。まして、その出自については、全く分からなかったのである。

唯一、佐藤條右衛門について分かっているのは、堀部安兵衛が元禄十五(一七〇〇)年十一月二十日付の青地与五兵衛宛てた暇乞状の末尾に、次の如く出ていることである。

「安兵衛殿、私など亡命之以後、私実方従弟佐藤條右衛門と申者方より相達シ申候、御暇乞、母妻儀など御頼申度如斯御座候、恐惶謹言、

(元禄十五年)

堀部安兵衛

十一月廿日

武庸(花押)

青地与五兵衛様

人々御中

これにより、安兵衛自身が佐藤條右衛門は安兵衛の実方の従弟であるとはつきり言っていることが分かる。

この宛名の青地与五兵衛は安兵衛が書いて幕府へ提出した「堀部安兵衛親類書 養方」には、

「一 従弟 安藤采女殿に罷在候 青地与五兵衛

とある。また、養父の安兵衛が書いた「堀部安兵衛親類書」には、次の如く出ている。

「一 同(甥) 紀州様御内安藤帯刀殿家来 青地与五兵衛

これらの記述によって、青地与五兵衛は安兵衛の養父安兵衛の甥、したがって、安兵衛の義理の従弟であることは間違いない。

また、佐藤條右衛門については、堀部安兵衛の養父安兵衛が吉良邸討入り後、切腹までの間預けられていた細川家の家臣堀内伝右衛門に語ったところが記録されており、その一節に次の如くある(『堀内伝右衛門覚書』)。

「一 安兵衛咄しに、倅安兵衛従弟佐藤條右衛門と申浪人御座候、先年長崎御奉行諏訪何某様にも浪人分にて被召連候、長崎にてくわもつ盗申足輕の類三人迄、條右衛門一人にて搦捕申候、今度内蔵助免し不申候得ば門内へ入不申候へ共、私老体にて介抱仕参り候、中々男らしき者にて御座候、併不男にて御座候、然共主取仕候はば主人の御心に叶候様奉公可仕ものに御座候」

この中で、佐藤條右衛門が「私老体として介抱仕参り候」と述べているが、『佐藤條右衛門覚書』によれば、吉良上野介邸討入り前後の安兵衛のことを、大体次のように語っている。

安兵衛は他の浪士達とは別行動をとり、家来徳兵

衛や佐藤條右衛門と一緒に吉良邸へ向かった。途中、神崎与五郎宅へ立寄ったが、既に浪士達は吉良邸へ向かった後であった。そこで、佐藤條右衛門が弥兵衛の手を引いて吉良邸表門に着くと、門が閉まっていたので、弥兵衛は脇に立てかけてあった梯子を使い、徳兵衛と條右衛門の助けを借りて無事門内に入ることが出来た。また、討入り後も條右衛門は弥兵衛の鎧と安兵衛の刀を担いで、弥兵衛の手を引き両国橋の袂まで行った。

これらの事を、「私弥兵衛が老体とて佐藤條右衛門が介抱仕参り候」と弥兵衛が語っていたのである。このことによっても『佐藤條右衛門覚書』はかなり信憑性が高いことが分かる。

また、『堀内伝右衛門覚書』の引用の冒頭で、「弥兵衛咄しに、倅安兵衛從弟佐藤條右衛門」と言っているから、佐藤條右衛門は堀部安兵衛の実方の從弟であると思われる。先述したように、安兵衛自身も佐藤條右衛門は実方の從弟であると言っていた。

二、佐藤條右衛門は佐藤新右衛門である

前節で述べたように、佐藤條右衛門が安兵衛の実方の從弟であるらしいことは分かるのであるが、残念ながら安兵衛が幕府へ提出した親類書には、從弟として佐藤なる者は居ないのである。

しかるに、元禄七（一六九四）年、安兵衛が堀部家に養子に入るに際して、堀部弥兵衛に提出した親類書の最後には、從弟として佐藤新五右衛門なる者が書いてある。そして、この佐藤新五右衛門について、左の如く長々と説明しているのである（三扶誠五郎編『中山安兵衛堀部弥兵衛父子契約の顛末』郷土研究社昭和九年六月三十日）。

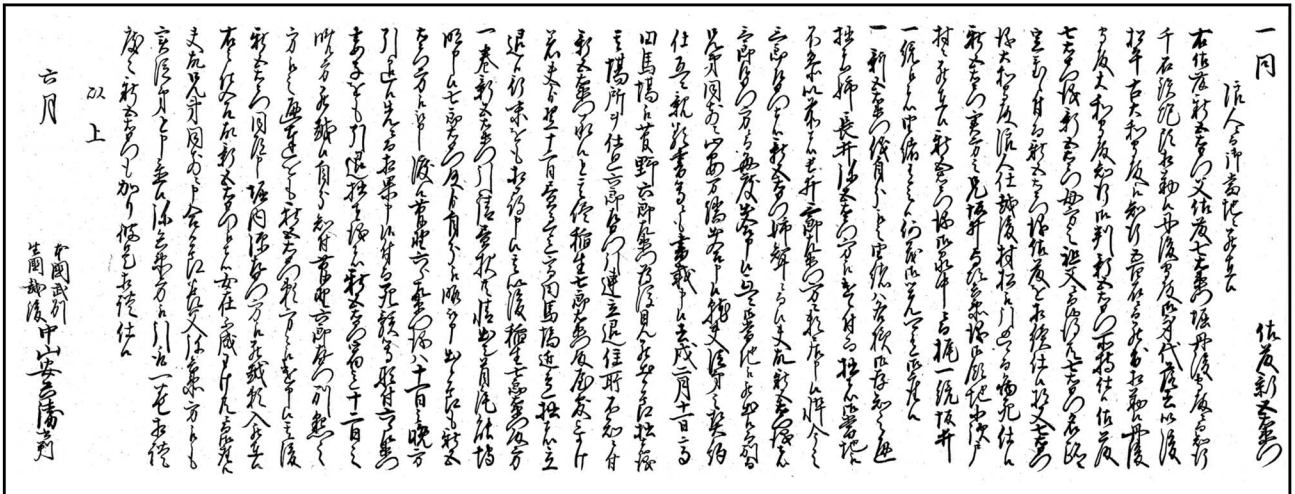


図1. 堀部家に提出した中山安兵衛の親類書に於ける佐藤新五右衛門に関する但し書き

この佐藤新五右衛門に関する但し書きによって、佐藤新五右衛門は安兵衛の本当の從弟ではないけれども、兄弟同然であり、互いに從弟の契約を結んでいるので、「弥兵衛方へも実從弟と申置候」と述べていることが分かる。

このことが安兵衛が弥兵衛の甥青地与五兵衛に語った「私実方從弟佐藤條右衛門」や、弥兵衛が堀内伝右衛門に語った「倅安兵衛從弟佐藤條右衛門」との記述につながったものと考えられる。

したがって、佐藤條右衛門と佐藤新五右衛門が同一人物であることは間違いないであろう。元禄七（一六九四）年頃には新五右衛門と名乗っていたが、元禄十五（一七〇〇）年頃には條右衛門と名を改めていたものと考えられる。

ところが、『佐藤條右衛門覚書』においては、「弥兵衛申候ハ是八倅安兵衛從兄ニて候佐藤條右衛門と申候」と浪士達に弥兵衛は紹介している。また、條右衛門自身も、

「私從弟堀部安兵衛方へ見廻候へ」と言っている。これらの事実から安兵衛と條右衛門は、お互いに相手を、それぞれ、「從弟」と言っていることが分かる。したがって、この二人はもしかすると、同じ年令だったのかも知れない。そこでお互いに親類書等に相手を「從弟」と書いていたのであろう。

この但し書きから、佐藤新五右衛門は母の嫁先子の坂井家で生まれたが、後に母の実家の佐藤家に養子に入ったことが分かる。また、この最後に「弥兵衛方へ引取り一卷相談度々新五右衛門も加り彼是相談仕候」とあるところから、堀部家との養子縁組にも安兵衛が、佐藤新五右衛門に養子縁組の経験者として相談に乗ってもらっていたことも分かる。

安兵衛と新五右衛門は、共に父親の代から浪人であること、共に養子になつてゐること、年令が同程度であることなど、余りにも境遇が似てゐるので兄弟同然に付き合ひ、お互いに従弟の契約をしたものと思われ、すなわち、刎頸の友だつたのである。

三、佐藤新五右衛門は新発田藩坂井一統

安兵衛が佐藤條右衛門に宛てた、吉良邸討入り当日の元禄十五（一七〇〇）年十二月十四日付の、次の如き暇乞状が残されている。

「亡主内匠頭警敵吉良上野介殿討取、内匠頭憤を為可散、今度同志輩ら一集、上野介殿屋敷へ討込申候、一生之為御暇乞、如此御座候、委細之儀は、別紙二相認申候間、我等父子亡命以後御披見、一紙之通、諸事御世話頼入存候、已上、

十二月十四日

堀部安兵衛

佐藤條右衛門様

この中で「別紙」とか「一紙」と言つてゐるものは、有名な元禄十五（一七〇〇）年十一月二十日付の親類の溝口裕弥等十名に宛てた暇乞状のことである。その末尾には次の如く出ている。

「佐藤條右衛門義、初中終之儀測底二存知罷在候二付而、此一紙頼置申候、拙者亡命以後河村忠右衛門殿迄相届可申候、右之一巻以後者態絶書二而候、此度為御暇乞如斯御座候、恐惶謹言

堀部安兵衛

武庸（花押）

十一月廿日

溝口 裕弥 様

上田 宗貫 様

坂井又太夫 様

坂井九太夫 様

窪田兵左衛門様

堀市郎右衛門様

河村丈太夫 様

河村忠右衛門様

坂井惣太夫 様

石林十之助 様

この宛名の溝口裕弥と上田宗貫は安兵衛の母方の伯父であり、他は全て従弟であるが、石林十之助だけが父方、他は全て母方である。これにより、安兵衛の母は兄弟姉妹中で最も早く生まれた第一子であると思われる。これは従来余り認知されていないが、注目すべき事柄である。

「此一紙、すなわち、この書簡を安兵衛が佐藤條右衛門に頼んで、宛名にもある河村忠右衛門に届けてもらったことが分かる。この中で、

付而

「佐藤條右衛門義、初中終之儀測底二存知罷在候二

と書いてあるが、安兵衛が佐藤條右衛門に関する但し書きで、「兄弟同然」と書いてゐるわけだから、佐藤新五右衛門こと條右衛門が、「初中終之儀測底二存知罷在」のは当然のことであろう。

佐藤新五右衛門に関する但し書きには、

「新五右衛門実方の兄坂井与次兵衛儀御領地小須戸村に罷在候

とある。これにより佐藤新五右衛門の実家は小須戸村の坂井家であることが分かる。これに続いて、

「新五右衛門儀御家中にて梶一統坂井一統へは由緒有之候、何れも御覚へ御座有るべく候

ともある。この事について少し考えてみたい。

先の書簡の宛名の溝口裕弥と坂井九太夫は、父子の関係であり、新発田家中坂井式部の長男修理の子孫である。また、坂井又太夫と坂井惣太夫は兄弟であり、やはり坂井式部の次男の子孫である。これら

の新発田における坂井一統と小須戸の坂井家とは親類であると思われる。小須戸の坂井家の記録にもその祖は武士であり、溝口秀勝侯と共に加賀から越後に来たと言われている。

溝口裕弥と坂井九太夫は共に梶家から嫁をとつてゐるので、これが梶一統とみなされたのである。そのようなわけで、小須戸の坂井家に生まれた佐藤新五右衛門は、新発田藩の御家中の梶一統、坂井一統とは由緒があるので、その但し書きの中で安兵衛は、佐藤新五右衛門のことを一族によく覚えて置いてもらいたと言つてゐるのである。

四、佐藤新五右衛門の父母

佐藤新五右衛門の実兄である小須戸村の坂井与次兵衛とは、実は新発田藩小須戸組の大庄屋であつて、坂井家は先述の如く、藩祖溝口秀勝侯と共に新発田に來た大變な名家である。次に小須戸村坂井家の系図を示す。

小須戸組大庄屋坂井家系図

初代 二代 三代 四代

兵右衛門——瀨兵衛——与次兵衛——与次兵衛  
吉房 吉次 吉隆 許房

さて、佐藤新五右衛門に関する但し書きの第二項には次の如く出ている。

「拙者御当地へ参らざる以前は長井三郎左衛門方に頼り居り申候 伴今の三郎左衛門は新五右衛門姉婿にて候

ここで、先に出てくる長井三郎左衛門は、戸頭村に住む新発田藩中ノ口組大庄屋長井家の隠居した父親の方であり、次に出てくる今の三郎右衛門と

は、その嗣子の現役の大庄屋の方である。そして現役の三郎左衛門の妻が、佐藤新五右衛門の姉である。安兵衛が言っていることが分かる。

ところで、戸頭の長井家の当主で元禄七（二六九四）年当時、生存していたのは五代正通五十八歳、六代通高三十六歳、七代通倫十四歳の三人である。この中に隠居した父親とその嗣子で現役の大庄屋の三郎左衛門が居るわけである。

その年齢を考慮して、七代通倫は現役の大庄屋ではあり得ない。したがって、現役の大庄屋である今の三郎右衛門が六代通高であり、安兵衛が世話になった隠居中の三郎左衛門が、その父親の五代正通であることが確定した。

さて、この六代長井三郎左衛門通高の妻が佐藤新五右衛門の姉であり、小須戸組大庄屋坂井与次兵衛が佐藤新五右衛門の兄であるから、長井家六代通高の妻と坂井与次兵衛は、妹と兄または姉と弟の関係にある。

大面組大庄屋や横越組大庄屋を務めた坂井家初代兵右衛門吉房は小須戸には住まず、寛永五（一六二八）年七月九日に大面村で病死している。また、坂井家二代瀬兵衛吉次は与次兵衛とは名乗っておらず、延宝八（一六八〇）年の段階では既に死亡している。佐藤新五右衛門の兄ではありえない。

坂井家で「与次兵衛」を名乗ったのは、三代吉隆、四代許房、五代隆英の三人である。そのうち、長井家六代通高の妻と同腹の関係にある、佐藤新五右衛門の兄の与次兵衛は坂井家何代であろうか。

坂井家四代許房は元禄四（一六九一）年生まれなので、元禄七（二六九四）年にはまだ四歳であるから、壮年の佐藤新五右衛門の兄ではあり得ない。それにも況して、当然のことながら、坂井家五代隆英は問題外である。したがって、佐藤新五右衛門の兄は、坂井家三代与次兵衛吉隆であることが確定した。

ところで、『長井三郎左衛門由緒書上』では、六代妻は「坂井与次兵衛女」と書いてある。また、七代の妻も「坂井与次兵衛女」と書いてある。しかるに、七代妻は天和三（一六八三）年生まれであるから、元禄四（二六九〇）年生まれの坂井家四代許房の娘ではあり得ない。また、延宝八（一六八〇）年没の坂井家二代吉次の娘でもあり得ない。よって、戸頭の長井家七代妻は坂井家三代吉隆の娘であることが決まる。すると、戸頭の長井家七代の妻は、六代妻の姪だったのである。

整理すると、戸頭の長井家六代妻は坂井家三代与次兵衛吉隆の姉妹である。しからば、その父は坂井家二代瀬兵衛吉次でなければならぬ。ところが、この二代吉次は与次兵衛とは名乗ってはいない。これによって、『長井三郎左衛門由緒書上』に六代妻が「坂井与次兵衛女」と書いてあるのは間違いであって、正しくは「坂井与次兵衛姉妹」または「坂井瀬兵衛女」でなければならぬ。

恐らく、結婚する前の延宝八（一六八〇）年には、既に坂井家二代瀬兵衛吉次は没していたので、「坂井与次兵衛姉（又は妹）」と書くのが正しかったものと思われる。

以上によつて、安兵衛が佐藤新五右衛門に関する但し書きに書いていたこと、すなわち、小須戸村の坂井与次兵衛が佐藤新五右衛門の兄であること、および今の長井三郎左衛門の妻が新五右衛門の姉であることの裏付けが、戸頭の長井家や小須戸の坂井家の家譜から完全にとれた。ただし、新五右衛門の兄の坂井家三代与次兵衛吉隆と、その姉妹である戸頭の長井家六代妻のどちらが年上であるかまでは分からない。

結論として、佐藤新五右衛門の父が小須戸組大庄屋の坂井家二代瀬兵衛吉次であることが確定したのである次に坂井家墓地の写真を掲げる。



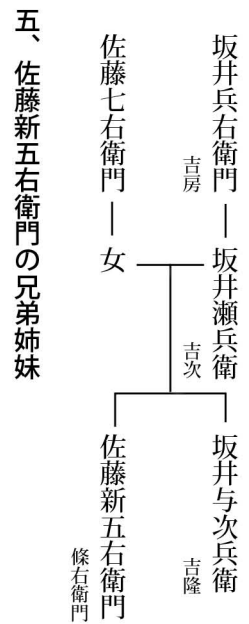
図2. 小須戸の茂林寺にある坂井家墓地  
(右手前が新五右衛門の父、中央が兄の墓標)

さて、安兵衛の書いた佐藤新五右衛門に関する但し書きには、次のようにも出ている。

「佐藤七右衛門儀、新五右衛門の母方祖父ニて候得共、七右衛門名跡ニ定置候ニ付て新五右衛門儀、佐藤を相続仕候」

このように、佐藤新五右衛門は母の実家佐藤家の名跡を継いだのであるから、父坂井瀬兵衛吉次の妻、すなわち、佐藤新五右衛門の母こそ、佐藤七右衛門の娘である。

総括すると、佐藤新五右衛門の父方の祖父は、坂井家初代兵右衛門吉房であり、その父は坂井家二代瀬兵衛吉次である。また、佐藤新五右衛門の母方の祖父は佐藤七右衛門であり、新五右衛門の母は佐藤七右衛門の娘である。以上の関係を次に示しておく。



五、佐藤新五右衛門の兄弟姉妹

安兵衛は佐藤新五右衛門に関する但し書きにおいて、

「拙者姉 長井弥五右(左)衛門方へ遣候二付て」と書いているが、安兵衛の腹違いの姉さんが嫁いだのは、中ノ口組大庄屋の戸頭の長井三郎左衛門家の本家筋に当たる牛崎村の長井家六代弥五左衛門政房である。

この弥五左衛門政房の嗣子である七代弥五左衛門政慶、すなわち、安兵衛の甥に宛てた、元禄十二(二六九)年九月十五日付の安兵衛の書簡がある。その本文の終わりから二番目の項目に、次の如く出ている。

「一 此度八、三郎左殿御内方弟坊主惠芳僧、七月中旬爰元へ被参、当月廿日前後二此元立被申候間、返報旁如此候。津兵衛事、十月中此方二罷在由二候間、惠芳僧へ頼申候儀、能可有之と存不取敢申入候。惠芳、度々拙宅へ参、一宿緩々と語、小須戸、戸頭之左右(かれこれ)承悦申候。」

ここで、右の「小須戸、戸頭之左右」の小須戸とは、小須戸組大庄屋の坂井家三代与次兵衛吉隆のことであり、戸頭とは中ノ口組大庄屋の長井家六代三郎左衛門通高のことである。

長井家五代正通は元禄十(二六九七)年に没しているのので、この書簡の「三郎左殿御内方弟」とは、佐藤新五右衛門の姉の弟である。したがって、僧惠芳と新五右衛門とは兄弟だったのである。これによ

り、佐藤新五右衛門には、少なくとももう一人の兄弟が居た事が分かる。

江戸の安兵衛を度々訪れたという僧惠芳が、佐藤新五右衛門の兄弟であることは、これまでの記述から分かったのであるが、それを裏付ける証拠はこれまでのところ残念ながらないのである。

ところが筆者が今から七年前に良寛の研究で入手していた、戸頭の大庄屋長井家の分家に当たる今井野新田の長井家の「覚書」なるものがあり、それは走り書きで書かれており、余り良く読めなかつたのでこれまで無視していたのであるが、今度、それを見直して見ると、それに実に変重要なことが書いてあったのである。それは次のようなものである。

坂井家二代の瀬兵衛吉次には、全部で二十一人の子供があり、先妻は戸口村名主五十嵐小右衛門の娘であり、その子供には横越組大庄屋を継いだ弥兵衛等十三人が居る。そして別腹の子供として八人が次の如く書いてある。

- 「1与次兵衛 女 長井三郎左衛門妻 小須戸組大庄や
- 2女 長井三郎左衛門妻 中ノ口大庄や
- 3宮島弥五兵衛 三条組大庄や
- 4佐藤寛兵衛 鯖江家中
- 5女 西方寺妻 鳥屋野
- 6吉祥寺 橋田村
- 7女 田中平蔵 五泉町人
- 8女 三井田團次妻 大も大庄や

これが生まれた順に書かれていることは「覚書」の他の記述からも十分に裏付けられる。これにより長井家六代三郎左衛門通高の妻は坂井家三代与次衛門の妹であることが確定した。また、戸頭の長井

家の「由緒書上」に二代に亘って、坂井家から娘が嫁いで来たこと書いてあったことが裏付けられる。

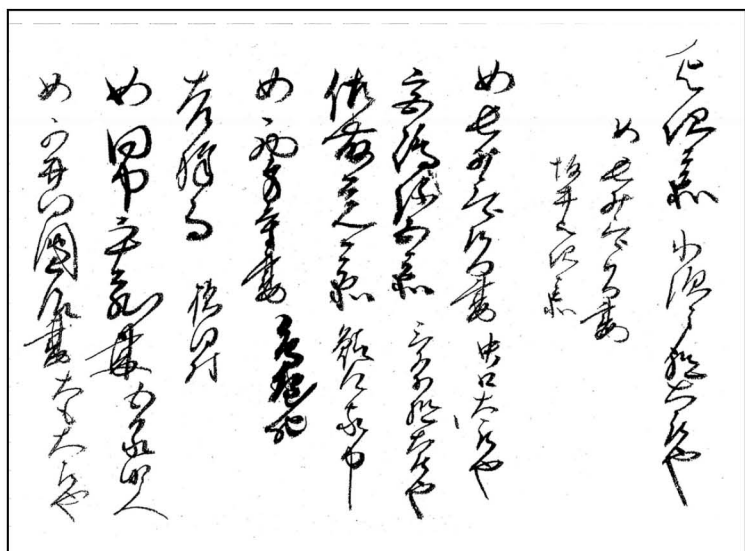


図3. 新五右衛門の兄弟姉妹

最も重要なことは佐藤新五右衛門が、この「佐藤寛兵衛」に他ならないことが決定されたことであり、新五右衛門の母は坂井瀬兵衛の後妻であることが分かったことである。

そして、僧惠芳が橋田村の吉祥寺の惠芳であることも分かった。事実、吉祥寺の十六世は聯山慧芳といひ、享保二(一七一七)年から同七(一七三三)年まで住職であった。これによって従来全く分らなかつた、僧惠芳の裏付けもとれた。

第三男の宮嶋弥五兵衛は村上藩三条組大庄屋の宮嶋家の四代目であり、その系図の弥五兵衛の所に

は、

「実は、新発田領大庄屋坂井瀬兵衛二男、後六助と改める」

と出ているので、宮嶋弥五兵衛の裏付けも取れた。坂井瀬兵衛と佐藤七右衛門女との間に生まれた第五女、第七女、第八女については、残念ながら裏付けはとれないが、八人のうち五人までがその裏付けがとれるので、その覚書の記述はかなり信憑性があるものと思われる。

いずれにせよ佐藤覚兵衛が佐藤新五右衛門であることは疑う余地がない。そうすると、佐藤新五右衛門が條右衛門と名を改め、さらに吉良邸討入り後に覚兵衛と名を変えていたことは間違いない。

六、佐藤新五右衛門の祖父七右衛門

佐藤新五右衛門に関する但し書きの初めに次の如くある。

「右佐藤新五右衛門父佐藤七右衛門、堀丹後守殿にて知行千石鉄炮頭相勤候。丹後守殿御身代落去以後、松平古大和守殿江知行五百石罷出相勤候」

この堀丹後守とは「御身代落去」とあることから、村上十萬石の藩主堀直奇と思われる。直奇の孫の直定の時代、寛永十九（一六四二）年三月一日に七歳で没してしまい、その嗣子が居なかったことから絶家となっている。このことが安兵衛の言う「落去」なのである。

堀直奇の出生は尾張国奥田村である。十四歳で豊臣秀吉の小姓になり、その能力を認められる。従五位下、丹後守の叙爵は天正十九（一五九二）年十二月である。慶長三（一五九八）年には父堀直政が五萬石を与えられて三条城主になると、一緒に越後に移り、秀吉から一萬石を与えられて坂戸城主になった。こ

の時、国主の堀秀政からも一萬石を与えられて合計二萬石となった。ついで、慶長十五（一六一〇）年には新知四萬石を徳川家康から与えられ、信濃国飯山城に移された。翌年には駿府城の火災を鎮火した功勞により、一萬石を加増され五萬石となっている。

片桐堂宇「再び夏之役に就て」（『松城史談』第十五号）によれば、慶長二十（一六四五）年の大坂夏の陣には、徳川勢大和口六萬の先手を務め、大坂城天守閣が炎上した五月七日午の刻時分、真田手へ取りかかり追いくずし、大阪城三の丸、千貫丸矢蔵門より入り、二の丸桜門迄侵入し、敵勢百二十余を討ち取る手柄によって、元和二（一六二六）年には越後国長岡城八萬石の大名に累進したのである。

この大坂夏の陣に於て、佐藤新五右衛門の祖父七右衛門は物頭であつて、五月七日の首帳には「二ツ佐藤七右衛門」と出ている。さらに、堀直奇は元和四（一六二八）年四月九日、長岡八萬石から二萬石加増されて村上十萬石へ転封となる。『村上江御入部之時分御家中侍大将物頭旗指物』に、佐藤七右衛門は「鉄炮頭中昇之紋、小指物共二並二百分指物」の項に次の如く出ている。

「一 昇の紋筋二すじ、指物白キ四半

佐藤七右衛門

また、村上入部後の元和五（一六二九）年に藩主直奇が物頭二十九名に宛てた六月二十五日付書状の宛名中にも、その十九番目に佐藤七右衛門の名が見える（新潟大学所蔵『堀家文書』）。

さらに、元和八（一六三三）年八月十八日の最上家三代義俊の改易による城受取に伴う「元和八年九月三日 最上家改易、堀家番勢の陣立と法度」前掲『堀家文書』には、右手九名と共に、

「 左手

いわた（音田） しゆめ（主馬）

佐とう（藤） 七右衛門

山中 さ（左） 内

ほり（堀） しゃう（庄） 左衛門

さと（里） 村 いおり（伊織）

やま（山） 川 久右衛門

おの（小野） かくえもん（寛右衛門）

はや（速） 見 もへもん（茂右衛門）

いの（井） 口 平兵衛

と記されている。そして、『枢要遺書』の中に出て「堀家陣備」にも、右手二組と共に次の如くある。

● 岩田八兵衛与（くみ）

山中左内

鉄炮式百五拾六人

佐藤七右衛門

堀庄左衛門

● 山川佐次兵衛与（くみ）

里村次右衛門

鉄炮二百式拾六人

小野次右衛門

庄林 外記

これには「子ノ九月吉日」と記されていることから、これは寛永元（一六二四）年のことと思われる。

一方、寛永十五（一六三八）年頃の『村上御在城之時 御着到』には、次の如く出ている（下記写真を参照されたい）。

左手

千五百石 岩田八兵衛

千石 佐藤庄藏

八百石 堀庄左衛門

五百石 里村七郎兵衛

二百石 里村半斎

五百石 伊地知（知地） 加右衛門

下組





と出ているので、先遣隊の家老植田半蔵が新領地鯖江五万石を幕府代官より請取ったのは、享保六(一七二一)年三月二十六日であることが分るが、四月十一日付十八番御用状には、

「御城引渡相濟此方御人数岩船町之内二止宿、」  
とあるから、村上城を内藤豊前守に引渡したのは、享保六(一七二一)四月十一日であることが分かる。したがって、先の「越後村上城引渡役割」はこの時のものであることも分かる。(『間部家文書』全五卷)。

四月四日は十六番御用状には、次の記載がある。  
「村上隣郷松山村、七湊村へも宿札被申付度旨被及相談候処、佐藤覚兵衛・郷司平馬方より岩船裏通浜町二八此方人数止宿致筈、(中略)松山村・七湊村に豊前守様衆宿札被申付候挨拶之儀、覚兵衛・平馬より如何様二申参候哉無心元候、」

これによって、この御用状に出ている佐藤覚兵衛、郷司平馬が、「越後村上城引渡役割」に挨拶人として出ている佐藤角兵衛、郷司平馬であることは疑う余地がない。

さて佐藤覚兵衛は鯖江藩においてどのような立場にいたのであろうか。鯖江藩における『藩庁日記』(前掲『間部家文書』)があり、その享保十三(一七二八)年四月十五日の条に次の如く出ている。

「一御礼畢而御役替被仰付候左之通  
一高拾五人扶持

三拾表御役割今度被下之 御徒頭より 佐藤覚兵衛右今般町奉行・寺社兼役清水五郎右衛門同役二被仰付候旨榎田半蔵申渡之

一 山奉行より 山田文左衛門  
右佐藤覚兵衛跡御徒士頭被仰付候旨右同人申渡之  
これにより、佐藤覚兵衛はそれまで高十五人扶持の

御徒士頭であり、この時から町奉行に取り立てられたことが分かる(前掲『間部家文書』)。

間部詮言の鯖江転封は享保五(一七二〇)年七月十六日であるが、その跡を継いだ鯖江藩主間部詮言の鯖江入部は、それより十年も後のことで、享保十四(一七二九)年六月五日である。この日、藩主を城下まで出迎えた家臣の中に佐藤覚兵衛が、

「一同所(喰違主手内) 御門前へ 町奉行 佐藤覚兵衛  
此所へ御用達町人中条十郎右衛門・福岡新兵衛罷出、覚兵衛披露仕候」

とでている前掲『間部家文書』。

そして、六月九日の藩主の入部の御祝儀の際の御目見えの藩士の中に「町奉行 佐藤覚兵衛」が居り、その嫡子として「佐藤猪之助」も居る。猪之助が覚兵衛の嫡子であることは父子の配列を見れば一目瞭然である。これにより、佐藤覚兵衛の嫡子猪之助も鯖江藩士になっていたことが分かる。藩庁日記には享保十九(一七三三)年頃まで、佐藤覚兵衛の名が見えるから、早くても享保十九(一七三三)年頃までは生存していたことが分かる。この時、覚兵衛は六十五歳くらいと思われる。

おわりに

佐藤條右衛門の出自が明確になったことで、『佐藤條右衛門覚書』の信憑性は疑う余地が無くなったことの意味は測り知れないものがある。どのような立派な実録であっても、著者が不明なままではその信憑性が疑われ、作り話とみなされることが多いからである。

堀部安兵衛は赤穂浪士四十七人の中でも、終始一貫討入りを主張し続けた急進派の筆頭であり、安兵衛が居なければ、吉良邸討入りは実現しなかったか

もしれないのである。

元禄の太平の世といっても、安兵衛には高田馬場事件での助太刀による実戦経験があったことは余りにも有名である。一方、佐藤條右衛門の方は、母方の祖父で養父の佐藤七右衛門は大坂夏の陣で首二ツをとる武功をあげた、正に戦国武将だったのである。この條右衛門が吉良邸討入り際に、色々協力し、門の外で見張りをしており、吉良邸討入りの見聞録をまとめたものには、それなりの因果があったのである。

赤穂浪士四十七人は赤穂義士と言われる。彼等は何故に生を捨て義をとったのであろうか。「仁なき所に義なし」と言われることは真理であろう。これは言いかえれば、「義ある所に仁あり」ということでもある。すなわち、義士たちが主君と仰いだ浅野内匠頭に仁があったということなのである。内匠頭の刃傷により赤穂藩が廃絶となり、彼らは浪人の身となった。この事自体、いわば内匠頭は家臣に対して不義をなしたのである。それにもかかわらず、赤穂義士四十七人は殿の不義に義で応えたのである。これは内匠頭の仁が不義よりも勝っていたということに他ならない。

吉良邸に討ち入り吉良上野介の首をとり、内匠頭の無念を晴らしたことは、今後とも末永く美談として語り継がれることは間違いないであろう。ただその美談は真実を以って語ってほしいものである。

最後に、良寛が赤穂義士の実録を読み、大儀に生きた四十七士に感激の余り、賦した詩を掲げて終る。

題義士実録末 良寛  
捨生取義古尚少 況又四十有七人  
一片忠、心不可転 令人永思元禄春

## 近年忠臣蔵事情

中央義士会  
中島康夫

赤穂市内で「義士」「義士会」という言葉を発しても、当たり前で不自然には思えない。

ところが、関東一円で「義士会」というと、右の方々の集まりと取られ、日々な思いをしていく。頭に「財団」の「財」が付いてやっとな救われているのが実情である。

私自身、毎々、そのような経験をして、今でも、僅かながらも不動産業に携わっているが、「義士会」の名刺を出しただけで、相手は硬直してしまう。とにかく、業種が変わると、理解していただけないようである。私だけでこんな塩梅であるが、会員からも同じ境遇を耳にする。今や、すっかり時代は変わったのである。百年以上、「義士会」

で通してきたが、いよいよ、来年は、会の名称を変えるつもりでいる。

NHKの歴史番組の司会者までも、元禄事件をして「テロ」と発言する。この言葉が、万人にどれほど影響を与えるか、NHKのプロデューサーも少しは考えて頂きたい。

プロデューサーの方々は、フィクションなら何も申すまいが、歴史番組と銘打つなら、まず、元禄事件を研究している学者を出演させるべきである。現在の番組作りは、〇〇大学の教授というだけで、外科の番組に、単なる内科医を呼んで番組を進めているのと同じ状態なのである。

出版社もわかり。編集部で忠臣蔵の史実をまとめ、後は、〇〇大学の教授の名

前で出版してしまう。これが、ほとんどの歴史書の現状である。結果、従来の忠臣蔵より一步も出ない、ゴミにしかない本を出版する。

おまけに、一部の反赤穂義士不忠論者の作家により、殿様精神障害者論を暖気もなく公共のテレビで発表されてしまうのが現状の媒体業の中の忠臣蔵なのである。

現在、日本で一部の地方（豊岡・新潟など）では、その地方の関係者（例えば、大石理政とか堀部安兵衛）の研究は、各々の学者により、一部の新事実などが解き明かされてはいるが、それ以外、一般の日本の大学で元禄事件の中核を研究している教授がいるのだろうか。もしいたら明日から直ぐ弟子になるつもりでいる。つまり、元禄事件の研究などしていない教授に出演を依頼しているのが現状である。「佐藤藤右衛門覚書」の何たるかも

知らない学者ばかりなのである。こんな番組に多額の金を使って「ただ、面白ければよい」番組を作っているのが、今のマスコミなのである。

ま、どこぞの教授などは、まるで漫談を聞いているような口から出任せに舌をすべらせる。プロデューサーも嘘の見分けがつかないから、漫談好みに面白い教授を出演させる。

国民よ、目を覚ましてほしい。先ず、真実を知ろうよ。真実を知った上で、文芸へ走る、芝居を作る、なら許されるが、作家は、真実を知らない方が、書きやすいという方もおられる。これでは、真実は見えてこない。医療が、間違えば、誤診となり、生命に関わる。政治の判断が間違えば、あの

大学の認可問題のようになり、涙する学生が出る。宗教が間違えば、サリン事件のようになる。しかし、近世（江戸時代）の歴史の

判断を間違えても、一人の被害者も出ない。実害がないのである。むしろ「いろいろな考えがある」、で片付けられてしまう。元禄事件は、生の人命事件なのである。活劇ではないのである。事件である以上、真実はいくつもあるわけではない。その一方、真実を個人が、自分の境遇に合わせて、「いろいろ思うこと」は当然である。

全国においてになる忠臣蔵ファンの方々は、嘘で固めた稚拙な歴史番組に騙されない教養を持つようではありませんか。

そして、稚拙な作家の歴史物に無駄なお金は使わないようにしようではありませんか。

「いろんな考え」といつている間に、一部作家のヘドロが忠臣蔵ファンの足許に押し寄せてきていることに気づいてほしい。元禄忠臣蔵は、真実探求で面白くすべきである。

# 創立104年記念

## 第10回忠臣蔵博士試験問題

### [注意事項]

- ・ 試験問題解答を調べるために、お電話等で各施設へ直接問い合わせることはおやめ下さい。
- ・ 同じく、会員同士でも試験のための連絡はおやめ下さい。特に申し上げたいのは、連絡しあっている方は、同じ答えで間違っているのですぐにわかります。
- ・ 問題をよく読んで、一言一言理解した上で、解答して下さい。問題を読み間違えないようお願い致します。ひっかけ問題がたくさん出題されています。
- ・ 文章での解答については、解答者が理解しているかを判断基準にさせていただきます。
- ・ 文章での解答については、要領を得ない場合は失点とします。
- ・ 解答がないと思われる場合は「なし」とだけ記入して下さい。
- ・ 文章を求める答えで、別紙を添付しても構いません。
- ・ 第10回忠臣蔵博士試験の解答票は、勉強会などで配布致します。別途必要な方は本部までご連絡下さい。
- ・ **最終提出日は、平成 25 年 10 月末日です。**

平成24年12月

第1問	元禄期の朝原文左衛門について思い浮かぶことを書いて下さい。
第2問	大石内蔵助が「涙を流した」という場面を示している一級史料がありましたら史料名を書いて下さい。
第3問	大石内蔵助が「怒った」という場面を示している一級史料がありましたら史料名を書いて下さい。
第4問	大石内蔵助は京都山科在住のおり、自分の刀を一本売りに出しました。いくらで売れたでしょうか。
第5問	井上万右衛門の主人の名前を書いて下さい。
第6問	現在、東京大学史料編纂所が預かっている、大石内蔵助と主税の木像を作った彫り物師はなんというでしょうか。名前を書いて下さい。
第7問	吉良邸討入り後、討入りの成功の報を瑤泉院用人落合与左衛門の所へ最初に知らせたのは誰でしょう。寺坂吉右衛門ではありません。
第8問	四十七士と関係のある僧で、赤穂随鷗寺に禅の修行に入った僧はどなたでしょうか。

第9問	討入り口上書は、どこの産の紙を使ったのでしょうか。地名を書いて下さい。
第10問	討入りの際、近松勘六が池に落ちますが、池に落ちたことで困ったことがありました。どんなことでしょうか。
第11問	元禄14年4月19日赤穂城明け渡しになりますが、入城する兵の鉄炮には実弾が入っているものなのでしょうか。 ①入れてない ②入れてある ③半分は入れてある
第12問	瀬尾孫左衛門の偽名が近年判明しました。その史料を現在所蔵している所を書いて下さい。
第13問	浅野大学は、義士切腹10年後、千葉の平郡(へぐり)に500石の知行を与えられていますが、その後、また所替えがありました。2ヶ村挙げて下さい。 ( )村と( )村
第14問	浅野家改易後、家老の藤井又左衛門は江戸の何という町に住んでいたのでしょうか。
第15問	大石内蔵助が第二次東下りの際、実際に江戸入りしたのはいつでしょうか。 ①11月5日 ②10月晦日には江戸をうろうろしていた ③11月5日後
第16問	大石内蔵助は、討入りの一年前、江戸へ来て瑤泉院らに討入りをして吉良を討つ密談しておりましたが、そのことを証明する史料はどのような史料でしょうか。
第17問	近松勘六には妻が居たようですが、罪が及ばないように、江戸へ出る前に離別したようです。離縁状なるものは存在するのでしょうか。
第18問	松之廊下事件より討入りまでは、1年10ヶ月なのですが、1年9ヶ月と書く歴史家が割と多いのですが、なぜ間違っているのでしょうか。
第19問	芝居では大星由良助の内室を「お石」と設定しておりますが、実在の「お石」はどなたの母親になるお方でしょうか。
第20問	討入りが終わって、まず四十七士は両国橋の東詰で小休止します。その当時、東詰は幕府の( )置き場でした。次の内より選んで番号を入れて下さい。 ①竹 ②石 ③材木 ④砂
第21問	垣見五郎兵衛、池田久右衛門は、大石内蔵助の偽名でしたが、内蔵助はもう一つの偽名を使っております。その偽名を書いて下さい。

第 22 問	<p>次の文①～④で正しいものはどれでしょうか。一つあげて下さい。</p> <p>①大石内蔵助は、東軍流免許皆伝である。</p> <p>②大石内蔵助は、山鹿素行より兵学を学んでいる。</p> <p>③大石内蔵助は、伊藤仁斎より古儀学を学んでいる。</p> <p>④大石内蔵助は、ぼたんの花を愛し、人にも差し上げていた。</p>
第 23 問	<p>大石内蔵助・主税親子が京都を離れる前、あるお宅へ最後の挨拶に伺いました。その時、主税が御馳走を食べ過ぎ、内蔵助は少し恥ずかしい思いをしました。どこのお宅でしょうか。</p>
第 24 問	<p>瑤泉院の里方である三次浅野家は、享保5年世嗣断絶で除封になりますが、その所領5万石はどうなったのでしょうか。</p>
第 25 問	<p>大石内蔵助が元禄15年12月13日に3僧に宛てた手紙は、現在、どこが所蔵しているでしょうか。</p> <p>①岩屋寺            ②正福寺            ③花岳寺            ④神護寺</p>
第 26 問	<p>近年、テレビの司会者ですら元禄赤穂事件を「テロ」と言い切る方がおりますが、あなたはこの発言をどのように思いますか。</p>
第 27 問	<p>大石内蔵助が尊敬していたとされる歴史上の人物の名前が内蔵助の手紙に残っておりました。どなたでしょうか。</p> <p>①楠木正成            ②源頼朝            ③徳川家康            ④北条時宗</p>
第 28 問	<p>大高源五は一時期、茶匠山田宗徧の門下となり、12月14日の茶会を探り出しますが、宗徧は討入りを知って教えたのでしょうか。思う所を書いて下さい。</p>
第 29 問	<p>学説ではないことを提起します。</p> <p>寺坂吉右衛門は、晩年、義士が切腹して果てた大名4家に囲まれた位置にある山内家や、曹溪寺に30年程住むこととなります。逃亡したとしたら、人間そのような場所で生活できるのでしょうか。あなたのご意見をお聞かせ下さい。</p>
第 30 問	<p>吉田忠左衛門の長女さんの夫は、本多家に仕える伊藤十郎太夫という方ですが、では、伊藤八郎右衛門という方は、どんな関係の方でしょうか。</p>

注意：・文章での解答が多いので、月一勉強会、水曜ゼミなどでなるべく解説をして参ります。勉強会の出席を第一と考えて頑張ってください。

- ・解答が的確でない場合、△印が付く場合がございます。△が2つで1点減点となります。
- ・問題そのものについてのご質問は幾つでも受け付けますので、何度でも聞いて下さい。

## 中央義士会 業務報告

年月日	項目	内容
平成23. 12. 15	松平隠岐守中屋敷跡見学	イタリア大使館 中島理事長他
12. 18	赤穂義士の引揚げルートを歩く	第9回忠臣蔵愛好会 荻原常務理事、柿崎評議員他
平成24. 1. 8	第38回月一勉強会	新橋 港区生涯学習センター 304学習室
1.19	理事会・評議員会	新橋 港区生涯学習センター 201学習室
1.27	NPO法人「江戸前21」「忠臣蔵を守る会」との共同開催イベント「みんなの忠臣蔵」開催	新橋駅集合(町歩き、田村邸跡、仙石邸跡、氷川神社など)参加、富岡副理事長、荻原常務理事他
2. 4	大石内蔵助ら切腹の地特別公開	旧細川下屋敷跡 講師 中島理事長
2. 5	第39回月一勉強会	新橋 港区生涯学習センター 304学習室
3.10	あの日、松之廊下で何があったのか 特別説明会	江戸城東御苑 講師中島理事長
3. 11	浅野内匠頭312回忌追憶の集い	泉岳寺
4. 8	第40回月一勉強会	新橋 港区生涯学習センター 304学習室
4. 10	分室事務所を松伏町から越谷市に移転	中島理事長
5. 13	第41回月一勉強会	新橋 港区生涯学習センター 304学習室
5. 23	第13回水曜ゼミ	新橋 港区生涯学習センター 205学習室
5. 27	理事会・評議員会	新橋 港区生涯学習センター 204学習室
6. 10	第42回月一勉強会	新橋 港区生涯学習センター 205学習室
6. 23	文部科学省、実地調査にくる	中島理事長
7. 8	第43回月一勉強会	新橋 港区生涯学習センター 304学習室
8. 5	第44回月一勉強会	新橋 港区生涯学習センター 303学習室
9. 2	第45回月一勉強会	新橋 港区生涯学習センター 205学習室
9. 9	理事会・評議員会	新橋 港区生涯学習センター 205学習室
9. 19	第14回水曜ゼミ	新橋 港区生涯学習センター 205学習室
10. 7	第46回月一勉強会	新橋 港区生涯学習センター 303学習室
11. 11	第47回月一勉強会	新橋 港区生涯学習センター 304学習室
11. 16	浅野梅堂本刊行	中島理事長
11. 17~18	文楽鑑賞と大阪忠臣蔵の旅	大阪 荻原常務理事、柿崎理事、三輪評議員、上原評議員、金子評議員、上森評議員、奥中会員、遠藤会員、岡本会員
11. 18	浦安 美浜公民館講演会	中島理事長
11. 25	浦安 美浜公民館講演会	中島理事長
11. 26	相生市歴史委員会来駕	中島理事長
12. 2	理事会・評議員会	新橋 港区生涯学習センター 205学習室
12. 8~9	両国・元禄市(義士祭)	中島理事長 他
12. 14	泉岳寺法要	中島理事長
12. 14	消防会館義士追悼祭	中島理事長
12. 14	赤穂義士討入り310年追憶の集い	泉岳寺
12. 15	吉良邸跡 現地特別説明会	講師 中島理事長
12. 16	赤穂義士の引揚げルートを歩く	第10回忠臣蔵愛好会 荻原常務理事、柿崎理事他

(財)中央義士会

副理事長 富岡克

東京都中央区在住

(財)中央義士会

評議員 金子堅一

東京都荒川区在住

(財)中央義士会

理事 高城和夫

東京都西国分寺在住

(財)中央義士会

常務理事 萩原栄

中央義士会のホームページは <http://www.12-14.jp/> でお

(財)中央義士会

理事 柿崎輝彦

横浜在住

(財)中央義士会

評議員 三輪三郎

川崎市麻生区岡上二四四二一七一  
電話 〇四四一九八九一五八五  
FAX 〇四四一九八九一五五六八

(財)中央義士会

評議員 上原益雄

東京都練馬区在住

(財)中央義士会

評議員 成清寛徽

千葉県浦安市在住

医療コンサルタント 訪問看護 訪問リハビリテーション  
株式会社メディカルオフィス ベラ

代表取締役 武類俊哉  
取締役所長 武類ますみ

東京都北区在住

(財)中央義士会

評議員 勝田芳造

  
〒一三三一一〇〇四三  
東京都墨田区立花四一三七一一八  
電話 〇三三三六一一三三二七

★新入会員紹介★(敬称略)

地区	会員別	芳名
習志野市	一般	浅井千春
港区	一般	遠藤光恵
草加市	一般	大塚幹雄
さいたま市	一般	金子あけ美
千代田区	一般	小西重兵衛
新宿区	一般	馬場智香子
足柄上群	一般	早川 武
大田区	一般	藤田光子

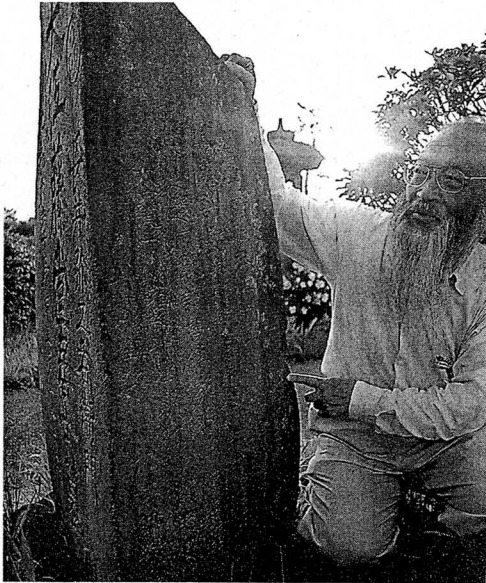
# 堀部安兵衛との縁、墓標に

## 姉の嫁ぎ先の長井家

江戸時代、赤穂四十七士の剣豪として知られ、新発田市出身の堀部安兵衛の姉さんが嫁いだ長井家の墓に、安兵衛と同家の縁についての記述が彫られているのが発見された。長井家は旧牛崎村(現新潟市南区)の豪農で、安兵衛は数年間、姉を頼って同家で暮らしていたとされている。安兵衛の調査をしている新潟大の富沢信明名誉教授が5月末に発見した。

【小林多美子】

長井家の子孫は県外に、崎に墓地がある。安兵衛出ていて、屋敷はすでに、について彫られていたの残っていないが、同区牛は、同家4代目の墓。側



堀部安兵衛の遺刀や書簡が長井家に伝わることなどが彫られた長井家4代目の墓で、内容について説明する富沢名誉教授

### 遺刀と書の継承記す

う。

安兵衛は父の没後、江戸に剣術修行に出る前の数年間を長井家で過ごし、数年前に江戸出府前に刀を残していき、その後、手紙を送っている。墓に彫られていた記述に出てくるのはこの刀と書簡と思われる。現在、新発田市に寄贈されている。墓地内にはこの4代目

面に、6代目の弥五左衛門に姉さんが嫁ぎ、1男2女をもうけ、同家に安兵衛の遺刀と書が伝わる。ことが彫られている。末尾に1875(明治8)年10月を指す年月と、13代目保の名が記されている。同家の子孫や菩提寺も、墓の記述の存在に気が付いていなかったとい

また、不明だった6代目弥五左衛門の没年月と年齢についても1698(元禄11)年に58歳で没

の墓以外は11代目以降しかなく、富沢名誉教授は「13代目が墓地を整備し直し、11代目以前の墓は4代目の墓にまとめたのではないかと推測。その際、赤穂四十七士として全国的な人気がある安兵衛とのつながりを側面に記したと思われる」とい

### 編集後記

一、今冬、浅野梅堂が町奉行をされたことと、佐藤條右衛門が町奉行されたことが、一緒に発表されたことは、単なる偶然か。

二、ホームページを作っている方で、自分並びに、自分の禅友人を「義士研究家」の称号で呼んでいる方がいるが、「家」が付くのは、その業務で生計を立てている方の事をいうのだよ。

三、ここまで條右衛門のことが分かってくと、改訂版を考えなくてはならなくなつた。

四、「忠臣蔵」は面白ければよい。といわれた事があった。「ドラマを見て下さい」としかいいようがない。

五、そういえば、最近NHKの歴史番組で「漫談」のように、面白く嘘をならべる、どこぞの教授が目につくが、あの手がプロデューサー好みということだろうなあ。

六、会員の方よ。君は「発掘のスコップ」を持っているか。「好きこそ○○○」が一番大事なんだけれど、段々にスコップを持つとうよ。

編集者

中島康夫(企画・編集・検証)

萩原 栄(編集) 富岡 克(校正)

(株) 正大印刷社 (印刷)